

岐阜の伊奈波の芝居小屋（2）

—末広座と国豊座 濃尾地震後の再築・再興—

Theaters in *Inaba* area of Gifu (2) :
Suehiro-za and *Kunitoyo-za* after the *Nohbi* earthquake

土 谷 桃 子

要旨：

明治初年の岐阜の伊奈波地域には、末広座、国豊座という芝居小屋があった。筆者は「岐阜の伊奈波の芝居小屋—末広座と国豊座—」（『岐阜大学留学生センター紀要2014』、2015.7）で、両座の開場について述べた。本稿はその続編として、明治19年（1886）11月に焼失した末広座、24年10月に濃尾地震で倒壊した国豊座が、その後どのように再築・再興されたのか、主として『岐阜日日新聞』の調査から判明したことを著したものである。両座ともに再築はスムーズではなく、年単位での時間がかかった。両座不在の間、伊奈波の空地が興行用地として使われることもあった。両座は最終的には再築され、末広座は規模を縮小して26年4月に、国豊座は会社組織による運営で28年12月に復活し、伊奈波の芝居小屋が再度並び立つこととなった。

岐阜の芝居に関する記録については、別途『岐阜地域芝居興行記録一覧稿（明治初年～）』（JSPS 科研費25370213（研究課題名：幕末から明治初期の岐阜の芝居（劇場と役者）の実態）助成調査成果）としてまとめたが、その調査過程で、両座以外の新興芝居小屋、来岐役者や上演演目等への目配りの必要性を感じた。今後はこれらの点についても考察したい。

はじめに

筆者は「岐阜の伊奈波の芝居小屋—末広座と国豊座—」（『岐阜大学留学生センター紀要2014』、2015.7）で、明治初年に開場した両座の動向を中間報告として著した。末広座は明治9年（1876）、国豊座は同11年以前に開場し、伊奈波に存する大規模な芝居小屋として興行を重ねた。実態を垣間見るべく、「団菊左」と並び称された9代目市川団十郎（1838～1903）、5代目尾上菊五郎（1844～1903）、初代市川左団次（1842～1904）の両座での興行実態を新聞及び雑誌記事から浮かび上がらせ、名古屋劇壇との関連が深いことや、役者たちが岐阜ならではの風物を楽しんでいたことを記した。

しかし、末広座は19年11月27日に焼失しており¹⁾、その後いつ再築・再興されたのかを明らかにすることはできなかった。また、国豊座は岐阜一帯に甚大な被害を与えた濃尾地震（24年10月28日）で被災したが、その後どのように復活したかも追えなかった。本稿では、継続調査（主として『岐阜日日新聞』を対象とした）で判明した、その後の両座の再築・再興の経緯を記し、前稿で述べた時期以降の明治の伊奈波地域の芸能状況の一端を明らかにしていく²⁾。

1. 末広座 ～焼失から再築まで～

末広座は、明治19年11月27日に焼失したが、その再築についての最も早い言及は、『岐阜市史通史編 近代』（1981）の「末広座は、翌二〇年一月四日元の大きさの小屋に新築することに決定した」（p.1057）であるが、残念ながらこの記述の根拠を確認することはできなかった³⁾。この記述を信じればすぐに再築が検討されたように見えるが、実際には再築までかなりの時間がかかっている。『岐阜日日新聞』で末広座（跡地）のその後を濃尾地震まで追うと、以下のような記事が散見される（旧字は新字に改める。空欄挿入、下線は筆者。振り仮名は適宜削除。以下の引用にても同様）。

○一町内の喧嘩 兼て本紙にも掲げし如く 今度末広町山手の稲荷堂を 末広座焼跡へ移す付ては 夫々入費も掛るとなればとて 町内より一同若干宛の金を献納したり（略）（岐阜日日新聞 明治20.9.15）

○国豊座移転 国豊座近傍には 今度倶楽部を設置するに付 同座は今度末広町旧末広座焼跡へ移転する由にて 目下其地主と談判中なりと聞く（岐阜日日新聞 明治20.10.1）

○鬪鶏処分 予て日外の紙上に掲げし 去十五日 当地末広町三浦千春氏の扣地（芝居小屋跡）にて 鶏の角力を興行せしせつ 密に懸勝負をなしたる科により 岐阜警察所へ拘引せられ（略）（岐阜日日新聞 明治21.3.28）

○寄合相撲 当地末広町の末広座の跡にて 来る二十六日 素人角力を興行するよし（岐阜日日新聞 明治21.4.21）

○喧嘩 一昨二十七日当地末広町の末広座跡にて 素人角力興行の際 厚見郡旦之島村の若者連と市中の者との間に 何かと口論を始め（略）（岐阜日日新聞 明治21.4.29）

○相撲興行 予て本紙に掲載せし如く 東京幕の内にて有名の力士 若湊、嵐山一行の大相撲は 愈よ来る三日より興行する由にて 場所は伊奈波広小路の如く記載せしが 末広町の旧末広座跡になりたりといふ（岐阜日日新聞 明治22.10.1）

これらの記事によれば、跡地は一定の広さがあることで相撲等の興行に活用されていたようだが、再築の気配はない。20年10月1日の国豊座移転の記事が気になるが、記事中の「倶楽部」が謎であるし、続報も見られない⁴⁾。なお、国豊座は同年9月に5代目尾上菊五郎を迎えた興行で好評を博しており隆盛である。21年3月28日記事の「三浦千春」という人物が調査の手掛かりになるかもしれないが、現時点ではこの人物について未詳である。末広座は再築の目処が立たないまま、濃尾地震に遭ったのではないかと想像される。

調査の過程で、末広座焼失後の事実と齟齬が生じている資料があったので、それらについて簡単に触れておく。『岐阜県史 通史編 近代下』（1972）に「岐阜末広座で一九年末「岐阜侠客水野弥太郎騒動」の上演があったと記載されているが（p.1003）、19年末には同座は既に存在していない。一方『岐阜市史 通史編 近代』には、「同年（=19年）六月九日から市川小伝治・市川照太郎一座の二の替りの戯題は岐阜の侠客水野弥太郎の騒動。」とある（p.1057）。末広座焼失の時期から考えて後者が正しいと思われる。末広座が焼失した19年の『岐阜日日新聞』は、1月から4月までしか現存せず、焼失前後の記事を確認できないため、『市史』が何を根拠にしたの

か確認できないのは残念である。

また、東京の演劇雑誌『歌舞伎新報』（歌舞伎新報社のち玄鹿館）の1027号（明治22.7.13）の「関西通信」の一部に「片岡我童は本月四日岐阜の末広座へ乗込 猶同所を打上 名古屋へ赴く都合なり」とあるが、『岐阜日日新聞』22年7月9日の「国豊座の芝居」記事に「片岡我童、尾上多賀之丞一座の芝居は 愈々来る十三日大入りにて興行することに決し」とあることから、これは国豊座の誤りである。濃尾地震前の末広座再築は、やはりなかったものと考えられる。

末広座焼失後、国豊座は次々と興行を重ねており、濃尾地震まで伊奈波の芝居を一手に引き受けていた感がある。国豊座の地震後の再築・再興については次章に譲るとして、末広座のその後を追うと、同座名がようやく現れるのは、濃尾地震から1年以上後の26年3月、4月である。

○末広座の小屋開き 今度岐阜市末広町に建築したる極小型の劇場末広座は 来四月四五日の伊奈波神社例祭日を当込み開場せんとの意気込みにして 既に名古屋市へ俳優を抱えに行きたるよし 多分は沢村四郎五郎の一座が来るならんとの評判なり（岐阜日日新聞 明治26.3.28）

○末広座の小屋開き 岐阜市末広町に新築せし小劇場末広座は 愈々明後三日の神武天皇祭を以て開場と定まり 出勤の役者は名古屋の山崎河蔵 嵐橋三郎一座にて 出物はおぼさかちんき魁難波戦十二幕通しなるよし（岐阜日日新聞 明治26.4.1）

せっかく開場した末広座だが、この興行はうまく行かなかったらしい。「末広座の評判」（岐阜日日新聞 明治26.4.2）では出演役者の悪口とともに「小屋開き早々ケチを付けては 末広座を改めて末狭座とせにやアならないからね」と、小屋の小ささも揶揄されている。更に、「見事に損耗」（岐阜日日新聞 明治26.4.14）では「役者と見物人と孰らが多いと云ふ様な不人気で 見事に損耗し」と赤字が暴露されている⁵⁾。しかし、その後素人芝居（同4.26等記事）、西洋手品（同6.6記事）、軽業（同6.20記事）、幻燈会（同7.9記事）等、小ぶりな小屋ではあるが多種多様な興行で人々を楽しませたようである。

これらの記事では、この新末広座が19年に焼失した旧末広座の再築であるとは明確に述べていない。しかし、「末広町の末広座」という場所と名称の一致と、以下に述べる新聞記事内の人名を手掛かりに、両者を結びつけることは可能だと考えている。

拙稿「岐阜の伊奈波の芝居小屋―末広座と国豊座―」で、明治初年に末広座を開場したのは、記録上のオーナーである安藤作次郎の父安藤半助という人物ではないかと記した。末広座焼失後も、末広町に安藤姓の者がいたことを記した記事がある。

○末広町に道場を開く 当市中竹屋町牧野某外二三名は 撃剣の稽古を為さんと談合し去る五日より末広町安藤九郎方の裏の土蔵を以て 撃剣の道場とし（略）（岐阜日日新聞 明治24.5.10）

末広座焼失後4年以上経ているが、同地に安藤姓の者がいた。それを踏まえると、次の記事の「小屋元の半助」は安藤半助ではないか。彼は小間物を扱うこともあったというが、それが「古道具」と表されているのではないだろうか。

○小屋元と鰻屋の八分 岐阜市末広町末広座にて 此頃中素人芝居を興行し居れるが 其の開場当日より 町内若者の承諾を経て 加和屋町の或る鮓屋が末広座の前へ屋台店を出せしに 其れが為め中店の売高に影響を及ぼしければ 小屋元の古道具半助は去る二日 右屋台店の退去を促したり 乃で末広町の若者連は忽ちメリ〜と掃溜の淵に生へた露ほどの青筋を額に現はし (略) (岐阜日日新聞 明治26.5.6)

この話の続きは、怒った若者たちが二度と末広座の木戸は潜らないと決し、その興行で主役を張っていた鰻屋の長男にも芝居に出るなどと言ったが、困った小屋元が親の鰻屋をおだてて長男を舞台上に上げるように仕向けたところ、若者たちが更に激高して鰻屋を町内八分にしたため、同店では鰻が売れなくて困っている、という他愛もないものである。日常的で他愛もない記事であればあるほど、ここに登場する「小屋元の半助」の存在が現実であったことを感じさせる。

焼失前の旧末広座は、団菊左を呼ぶほどの大きな芝居小屋だったが⁶⁾、再築後の同座では大歌舞伎を呼んだ形跡はない。しかし、濃尾地震で壊滅した国豊座が28年12月に再築されるまでの間、伊奈波の芝居を担ったのは末広座であった。『岐阜日日新聞』新聞紙上に繰り返し現れる同座の素人芝居興行の記事に、末広座が観客席からも舞台上からも慕われていたことを読み取ることができる。

2. 国豊座 ～濃尾地震からの再興～

明治24年10月28日朝、後に濃尾地震と言われる大きな地震が岐阜地域を襲った。死者7,273名、全半壊家屋22万2,501という甚大な被害を引き起こし、伊奈波地域にあった国豊座も倒壊した⁷⁾。当時既に末広座はない。この地震がきっかけとなり、岐阜地域の娯楽の中心地は伊奈波地域から南下することとなる。

面白いことに、濃尾地震で被災した伊奈波以外の岐阜の地では、同地震後かえって芝居が好評になった記録があった。名古屋の役者が皆景気のいい岐阜に行ってしまう、名古屋が空になったという。

○俳優の話し 岐阜地方は震災の為め一時は世が減する様な有様なりしが 所謂世直し地が揺つて景気が定まり 此頃に至つてはドシドシ金儲けがある 依つて名古屋より幾層人氣がよいか知れず 芝居も諸方にあつて何れの興行も当たらぬなし 然から名古屋の俳優は 大体岐阜県へ出稼ぎに行き 幾人といふ程しか残つて居ないといふ景気に 松本錦升の一座は中村知鶴を一枚加へて同県恵那郡岩村へ昨日出発したり 是れにて名古屋に居残りの俳優は皆無といふべし (金城新報 明治25.4.23)

また、地震があつたにもかかわらず素人芝居に熱を上げる若者に苦言を呈する『岐阜日日新聞』記事も少なからず見受けられ、岐阜の芝居熱は地震でも冷めることはなかつたようである。岐阜における素人芝居(地芝居・地歌舞伎とも)の隆盛は本稿の主旨と離れるが、いずれ考えてみたい課題である。

伊奈波に話を戻すと、濃尾地震の24年10月から末広座が復活する26年4月までの間、芝居小屋

は存在しないのだが、開帳などに合わせて徐々に賑わいを取り戻し、芝居等も興行されるようになったらしい。以下6番目の記事「芝居小屋の立廻り」二重下線部にあるよう、空地に仮小屋を建てていたのだろう。最後の記事「竹澤亀吉一座の軽業」は、末広座の開場後であるが、引き続き空地が興行地として活用されていたことを示している。

○伊奈波の賑ひ 当市伊奈波は震災以来至つて淋しかりしが 目下薬師如来の開帳に納涼かたがた 旁々出掛くる者多く 見物の興行なども有り 中々賑ふ由 (岐阜日日新聞 明治25.8.12)

○女足芸 当市伊奈波に於て 今三日夜より女足芸を興行するよし (岐阜日日新聞 明治25.9.3)

○伊奈波善光寺の開帳 当市伊奈波善光寺如来の開帳は いつぞや 日外の本紙に掲載したる如く明七日(旧七月十七日)より 向一週間執行する趣きなるが 明日は彼のお十七夜と称へて早朝より尾張地方を始め遠近の男女陸續参詣するなるべく 天気都合さへ好くば 市中も頗る賑合ふ事ならん (岐阜日日新聞 明治25.9.6)

○伊奈波の芝居 当市伊奈波に於て明二十八日より 此の程の本紙にも掲載したる彼の市川鱗花改め重五郎を座頭とし 中村松鶴、市川高之丞等的一座 芝居の大入をなすよし 外題は再仇討三世主取ほりべやすべいちだいき(十二幕通し)なりと云へば 例の轟真連は初日からドシ〜見物に出掛くる事なるべし (岐阜日日新聞 明治25.9.27)

○伊奈波の芝居は昨日大入 去る二十八日より当市伊奈波に於て興行をなすべき筈の市川鱗花改め重五郎一座は 雨天の為め延引して昨三十日より大入興行せりといふ (岐阜日日新聞 明治25.10.1)

○芝居小屋の立廻り 当市益屋町柴田松次郎が一昨夜八時頃 目下伊奈波に於て興行中なる市川重五郎一座の芝居仮小屋としごらの前に居ると 年配二十七八の男が松次郎の懐中へ手を入れたので 松公は 曲者何しやアがると 其の手を引捕へて立ち回りし末(略) (岐阜日日新聞 明治25.10.4)

○伊奈波芝居の二の替り 去月三十日より当市伊奈波に於て興行大人気を占めたる市川重五郎一座の芝居は 今七日より二の替りとして 先年国豊座にて好評を博したる義兄弟三家英勇ごさんけさんゆうしといふ面白い芸題を 大序より敵討迄十二幕演すよし (岐阜日日新聞 明治25.10.7)

○伊奈波の芝居 当市伊奈波に於て今二十三日より 中村芝右衛門、嵐豊司一座の芝居を興行す 芸題は有馬筆錦ありまふでにしきのふちどり之縁取を 大序より大切までの由 (岐阜日日新聞 明治25.10.23)

○伊奈波芝居の芸題替ふ 当市伊奈波にて興行中の中村芝右衛門一座芝居は 今日より二の替りとして 四ツ谷階段お岩実記十八冊続きを車輪で演ずるよし (岐阜日日新聞 明治25.11.1)

○興行二件 昨夜より当市今小町関本座に於て 善光寺由来記の造り物興行を 又来る廿五日より当市伊奈波に於て 目下尾州中嶋郡に興行中なる東京大坂合併相撲の興行を為す由 (岐阜日日新聞 明治25.11.22)

○竹澤亀吉一座の軽業 当市伊奈波の空地に於て昨十三日より竹澤亀吉一座の軽業興行を始めたるよし (岐阜日日新聞 明治27.3.14)

伊奈波地域の濃尾地震からの復興は、国豊座の再築の気運も高めた。最も早くこの件に言及したのは、25年8月末の記事である。

○国豊座再築の計画 岐阜の伊奈波と謡はれし繁華の地も 昨冬の震災火災以来 景気を下向に取られて 凄^{おそろ}い程淋しくなり 伊奈波が淋しくなれば淋しくなる丈下向が盛んになり 廓の事は別問題としても 八間道辺に劇場を建築するなど、云ふう人気 捨置く可きに非ずと 旧伊奈波国豊座の座主等は昨今頭を擡げ出し 愈々劇場再築の評議を決定して 既に四五日前 図面の調整を了りたる由にて 近日其の筋の允許を受け 直ちに工事に着手するといふ（岐阜日日新聞 明治25.8.24）

○伊奈波善光寺堂の再建 当市伊奈波善光寺堂は 昨冬震災火災の当時焼失し 僅かに仮堂を建立せしま、今日に至りたるが 今回いよ―市中の有志者が発起尽力して本堂の再建を計る由にて 目下其の絵図面を調整し居るといふ、国豊座再築の計画と云ひ 又此の善光寺堂再建の発起と云ひ 追ひ―上向に景気を付くると覚へたり（岐阜日日新聞 明治25.8.26）

更に10月になると、場所や時期や招く役者等、より話が具体的になってくる。

○劇場国豊座の再築 当市伊奈波劇場元国豊座の小家元は 今回隣地安乗院地内に 広大にして立派なる東京風の劇場を再築する事に頃日評議一決し 愈々来る十二月頃より普請に着手して 来春早々花々しく小屋開きの式を挙げ 大立物を聘して興行せん都合のよしに聞けり（岐阜日日新聞 明治25.10.21）

これらの記事を読むと、国豊座はすぐにでも再築されそうであるが、実は歩みは順調ではなく、この後全く話題に上ってこなくなる。再び確認できるのは翌年6月で、その後は10月と翌年1月と、散発的に紙面に現れる。

○国豊座の再築 岐阜市伊奈波の元劇場国豊座（震火災の為め灰燼となりし）再築も 最早や久しい話しなるが 今度旧小屋元一同 いよ―相談を纏め 近日標杭を建てるといふ 扱て其の場所は元西行庵の跡だとの事（岐阜日日新聞 明治26.6.2）

○国豊座の再築 震火災の為め烏有に帰したる当市伊奈波の劇場国豊座は 今度愈々旧小屋主一同に於て再築の相談纏り 既に四五日前再建築用地の標杭を建てたり 猶ほ場所は従前の地なるが 小屋は余程立派なるよし（岐阜日日新聞 明治26.10.31）

○国豊座の再築 震火災の為め烏有に帰せし当市伊奈波国豊座は 愈々近日立派なる改築に取掛るよし（岐阜日日新聞 明治27.1.1）

標杭を立てた、愈々であるという再築の掛け声は定期的に聞かれるが、なかなか実際の行動につながらない。26年4月には末広座が開場しており、芝居を求める世間の声は小さくなく、再築に何らかの故障があったことが次の記事からうかがわれる。

○国豊座の再築 当市伊奈波の劇場国豊座は 旧位置に再築せん筈なるも 取引所位置未定の為め 其れ等の影響にて 猶ほ工事着手を見合せ居る趣きなり（岐阜日日新聞 明治27.2.6）

ようやく本当に話が具体化するのは、濃尾地震から約4年、前掲記事から1年以上を経た翌28年9月であった。ここからは今までの逡巡が嘘のように順調に計画が進み、いよいよ柿落しの興行に漕ぎ着ける。

○劇場新築工事の入札 岐阜市伊奈波の劇場国豊座は 旧株主に於て愈々新築する事に確定し 今二十日を以て右新築受負工事の請負入札を為すよし（岐阜日日新聞 明治28.9.20）

○国豊座の手斧始め 当市伊奈波劇場国豊座再築のことは 屢々本紙に記せしが 右は愈々今日手斧始めを行ひ 来る十二月中旬には落成を告げ 来年一月に開場式を行ふ目算なるが 其工事費金は三千円の予定なりといふ（岐阜日日新聞 明治28.10.10）

○国豊座の工事 当市伊奈波国豊座は 国豊演劇合資会社といふを創立して 既に再築工事に着手したる由は先日の本紙に記せしが 工事も着々歩を進め 来る廿八日頃を以て立前を行ふ筈なりと（岐阜日日新聞 明治28.10.22）

○伊奈波の近況 岐阜市の繁華の中心として 震災以前まで殊の外賑はしかりし伊奈波は 震災後打つて変つて淋しき場所となりけるが 爾来追ひへに景気を恢復し 昨今にては芸妓屋も二軒ほど御神燈をブラ下げ 又料理屋も余り上等といふには有らねど数軒あり 汁粉屋 鶏肉屋とりやなども甲処乙処こかしこに行燈を出し 入口の角には寄席と勸工場も出来たる上 劇場国豊座もいよへ新築に取掛りたれば 何となく以前の倂げを見るの思ひありて 急に旧態に復する事は六かしきも 次第に繁昌を來たすならんか（略）（岐阜日日新聞 明治28.11.1）

○国豊座の落成近し 当市伊奈波の劇場国豊座は 去る明治廿四年の震災に焼失したるまゝ、久しく再築の運びに至らず 人をして岐阜市に一の好劇場なきを遺憾に思はしめし事久しかりしが 愈々岐阜演劇株式会社なるもの起り 其手を以て之を新築するの運びとなり 過日貴校以来専ら工事を取急ぎたれば 最早や瓦伏せを終り 今月一杯には是非とも全部成功せしめ 大道具小道具の類 是れ又手を分つて大至急に調整し 来月早々花々しく小屋開きの興行を為すべしとの事にて 今より市中却々の人気なれば 開場の暁きには定めて非常の大入を占むる事にならん 因に同座小屋開きの初興行には 当地出の大阪俳優卯三郎を初め 鴈次郎、琥珀郎、珊瑚郎など花方揃ひの一座を招き 出しものは吉礼を選び 一挙して大当りを占だまんもので 昨今座元相談中のよし（岐阜日日新聞 明治28.11.14）

○国豊座の落成 当市伊奈波劇場国豊座は 過日来新築中の処ろ 愈々落成したるを以て 本日其筋の検査を済まし 来る十三、十四両日の中には小家開きを為す筈にて 出勤俳優は夫の当市出生の大坂役者尾上卯三郎及び中村富十郎の二人丈は既に確定し 其他東京役者をも招かんとて 目下掛合中なりと（岐阜日日新聞 明治28.12.4）

拙稿「岐阜の伊奈波の芝居小屋一末広座と国豊座一」で、岐阜の土地・産業・教育・警察等全般を調査した『岐阜県治一斑』の第1回実施分（明治28年）の「商業 会社」の項目に、「国豊演劇合資会社 演劇場ヲ建設シ 之ヲ貸貸若ハ演劇ヲ興行ス」があると指摘したが、上記3番目

の記事「国豊座の工事」によれば、これはまさに28年に国豊座が再興するその時に組織された新会社だったわけである⁸⁾。

国豊座の小屋開きに呼ばれたのは、岐阜市出身の2代目尾上卯三郎（1860/61～1928）であった。初代卯三郎門人で、主に上方で昭和初年まで活躍した役者である。ご当地役者として柿落しに相応しい人物である⁹⁾。このとき共演する中村富十郎は3代目（1866？～1901）である。小屋開きは同年12月14日と決まった。

○国豊座の小屋開き 屢々記したる当市伊奈波劇場国豊座の新築工事も愈々成工の運びに居たりたと以て 来る十四日を以て小屋開きを為すことに確定したり、出勤俳優は大坂にて花方の当市出身俳優尾上卯三郎及び、中村富十郎（目下東京歌舞伎座出勤中）、中村駒之助（東京春木座出勤中）に 尚ほ中村駒雀を差加へ 毎日午前八時より開場 昼夜通しにて勉強するとの事（略）（岐阜日日新聞 明治28.12.11）

卯三郎、富十郎に加えて春木座の座頭も勤めた4代目中村駒之助（1848/49～1900）も呼ばれている¹⁰⁾。まずまずのビッグネーム揃いだと言っていだろう。文中の中村駒雀は、7代目浅尾奥山（1863～1925）であろうか¹¹⁾。愈々開場した状況はどうだっただろうか。

○国豊座小家開きの景況 当市伊奈波に再築せる劇場国豊座の小家開き興行は 予て触込みの通り昨十四早朝より蓋を明けたり 其の景況をザツト記さんに 見物の中には初雪の寒さにもメゲず 五六里の道を懸けて態々出て来たといふ剛勢な連中もあり 互ひに玄武門の先登を気取つて 我れ一に上等の場所へ御輿を据ゑんものと 前夜十時ごろよりと犇々と小屋前へ押寄せ 手拭に味噌玉を包んで立つもあれば ケツトに身をくるんでシヤガムもあり オ、寒いぞ〜と 遼東半嶋雪中の露営宜しくといふ辛さを忍んで札の売出しを待つといふ人気 扱も劇道信仰の善男善女茲許殊勝と申すべし 聴て午後七時には見物を入れ 八時頃にはシヤギリ太鼓の音勇ましく 愈々爰に新舞台の幕を明けしが 雪の中にも拘はらず 木戸は忽ちメ切となり 東京本郷春木座々附の座頭中村駒之助、大坂道頓堀弁天座の座頭尾上卯三郎（当市出身）及び東京木挽町歌舞伎座出勤中中村富十郎の三優を初め 役々何れも好評なりしが（略）当市近來の大芝居好劇家は何れも大喜びの模様 殊に卯三郎は故郷の事とて人気高しとぞ（岐阜日日新聞 明治28.12.15）

卯三郎自身も、伊奈波神社社殿への寄付をするなど、地元を飾る思いであったことが類推される¹²⁾。しかし、千秋楽に近づくにつれて本興行は盛り下がってしまったようで、必ずしも大盛況とはならなかった。まだ馴染みのない「会社」という形態での運営に苦勞している様子もうかがえる。

○国豊座の芝居 昨今興行中なる当市伊奈波新劇場国豊座の芝居は 蓋を明けぬ前の評判程にも無く 開場後無類飛切と云ふ人気立たざるは如何のものにや 俳優は兎に角立者二三枚の揃ひ 特に尾上卯三郎は故郷の事とて車輪玉の働らき 加之に場代は低廉し 小家から道具は新らしく 如何して見ても岐阜市を騒がせる程の評判と人気が出なければならぬ勘定

なれど 市中の風呂屋評は先づ^{まづ}と云ふ有様は不思議 夫れも其の筈 之れと賞め立てる廉が無いとか云ふ者もあり 去る代り会社組織の劇場で株主一同が勸進元なれば 毎日内輪揉めのする事甚しとか云へり 能く揉み上げて将来の評元を取る積りにや (岐阜日日新聞 明治28.12.18)

○国豊座芝居の千秋楽 当市伊奈波国豊座の小家開き興行は 蓋開け以来可なりの入りを占めしも 一昨日に至りて人気はガツタリ落ちて 見物は小家の殆んど半分位ひしか無かりしかば 「廿一日限り日延なし」との貼札を市中一般は勿論 近在まで出しありしにも拘はらず 俄かに一昨十九日にて千秋楽となし 小家開き早々^{なりゆき}ウンをつき 面白からぬ評判を招きたるは亦是非もなき成行といふべし (岐阜日日新聞 明治28.12.21)

初興行は残念な幕切れとなったが、その後の国豊座の記録を繰ると、精力的に興行を打ち人氣が高いものも少なくない。開場翌年の29年6月には初代左団次一座を呼ぶことに成功し、非常の大入りを誇った(拙稿「岐阜の伊奈波の芝居小屋-末広座と国豊座-」参照)。同年11月には川上音二郎一座が舞台上に上っている(『岐阜日日新聞』明治29.11.8他)。小ぶりの興行が多く見受けられる末広座に対して、国豊座は伊奈波の大劇場として復活したと言っているだろう。明治初年とは景色が違うが、このようにして明治20年代末期に両座が再び伊奈波の地に並び立ったわけである。

3. 周辺と拾遺

筆者は伊奈波の芝居ひいては岐阜の芝居の姿を浮かび上がらせるべく、『岐阜日日新聞』を初めとした資料から、出来る限りの事実を拾ってきた。その成果(中間報告ではあるが)は『岐阜地域芝居興行記録一覽稿(明治初年～)』(JSPS 科研費25370213助成調査成果)としてまとめた。この調査の過程で、今後追求したい興味深い点が複数見つかった。それらについて簡単に触れておきたい。

『岐阜地域芝居興行記録一覽稿(明治初年～)』を見ると、末広座と国豊座が姿を消している間に新築され、盛んに興行を打ち続けた小屋があることが如実に分かる¹³⁾。その中から、関本座(関本席とも)と美殿座を『岐阜日日新聞』記事から追ってみる(括弧内の年月日は『岐阜日日新聞』の記事掲載日)。

関本座は、今小町の尾関万次郎が新築した(明治22.4.4)。落成後初の興行は、5月5日からの講談浮れ節の吉川虎丸の興行であった。(同5.2)。その後、上竹町常磐津師匠岸澤加久壽の門弟の温習(同5.13)、東京講師一徳齋親玉一座(同5.16)、岡田屋小団次の浮れ節(同5.25)、風流浪華節白里軒岡山一座(同6.6)、東京府女太夫竹本小土佐と当地豊澤廣猿一座浄瑠璃興行(同6.18)、笹川東玉の軍談浮れ節(同6.25)というように、ほぼ切れ目なく種々の興行が続く。舞台上に上った者たちについては未詳であるが、様々な芸人が岐阜の地を彩ったことは確実であろう。

現在の柳ヶ瀬地域的美殿町に作られた泉座は、伊奈波の芝居が絶えていた頃、主たる劇場の地位を占めた。上加納の棚橋常八等が美殿町泉座建築許可を得(明治25.7.31)、開場が噂され(同8.31、9.22、9.25、10.11、10.12)、いよいよ小屋開きは名古屋末広座興行後の片岡我当一座であった(同10.15、16、19)。その後、片岡我当一座の二の替り(同10.21)、市川重五郎二の替り(同11.10)、

名古屋の服部武三郎が興行主で歌女太郎・橘蔵等の興行（同12.11）、京都の嵐寿三郎同三勝一座の安芝居（同12.29）、泉座安芝居二の替り（明治26.1.8）、同三の替り（同1.11）と、ほぼ毎月興行が打たれる。30年に改築され名称も美殿座に改め、興行を続けた模様である。

その他に、蛭子座（笹土居町）、泡雪座・寿座（金津廓）の名前も多く現れる。岐阜市を離れると大垣の高砂座・宝福座、多治見の榎元（榎本）座の記事も目立つ。榎元（榎本）座は、26年1月に中村芝翫一座（4代目、1830～99）を呼び大成功を取めたが、その舞台で芝翫が足を痛めて要療養という話題も劇界に提供している。

このように、筆者が追跡に力を注いだ末広座と国豊座の他にも、岐阜には多くの芝居小屋が出現し、大小様々な娯楽を人々に提供していたのである。

本稿は、芝居小屋というハードの側面に焦点を当てていたため、役者や演目などのソフト面についてはほぼ手付かずである。今後の課題である。例えばどのような事項を拾えたか、今後の研究の頭出しとして紹介しておこう。

明治26年4月に再出発した末広座において、未曾有のロングラン興行をした女役者がいる。上方の女役者で市川鯉京という人物であるが、27年4月から11月まで、実に三十九の替りまで末広座で興行を続けている。安いから人気なのだという記事もあるが、三十九の替りまで打ち続けられるレパトリーの広さには感服する。翌年にも末広座で興行をしており、岐阜との薄からぬ縁を予感させる。

演目について言えば、筆者は以前、明治15年の板垣退助の岐阜遭難事件の芝居化について論じたが（「板垣退助岐阜遭難の芝居～明治十五年の作品を中心に～」『岐阜大学国語国文学』38、2012.3）、その時同芝居の上演が確実に確認できた下限は、26年1月の壮士芝居「板垣総理岐阜春雨」（名古屋・音羽座、武知元良一座）であった。しかし、今回の調査で、29年6月に泉座で川上薫一座が「板垣退助君岐阜遭難実記」を上演していることが判明した¹⁴⁾。先の調査で見出せなかった事実を発見したことは、本稿の主旨とは離れるが、筆者にとってはひとつの成果であった。当たり前のことであるが、地道な調査を継続することの意義を改めて感じた。

おわりに

明治初年の岐阜の伊奈波の芝居の象徴であり中心であった末広座と国豊座が、前者は明治19年11月に焼失、後者は24年10月に倒壊してからどのように再築・再興されたのかを示すことが本稿の目的であった。『岐阜日日新聞』に丹念に目を通す中で、末広座は26年4月、国豊座は28年12月に再築されていることを明らかにした。ある程度目的は達したと言っているが、新旧末広座をまっすぐ結びつけられる根拠が十分ではないし、国豊演劇合資会社のメンバー等の詳細も不明である。これらを脳裏に留めつつ、今後は「3. 周辺と拾遺」で示したような、両座の周辺や役者等のソフト面の謎に迫っていきたい。また、前稿「岐阜の伊奈波の芝居小屋－末広座と国豊座－」でも言及した、岐阜で盛んな地芝居・地歌舞伎のことも、大いに気にかかっている。大局を忘れることなく、同時に細部への目配りを怠らない調査を今後も継続していきたい。

なお、本研究は、JSPS 科研費25370213の助成を受けたものである（研究課題名：幕末から明治初期の岐阜の芝居（劇場と役者）の実態）。

注

- 1) 末広座の焼失については、名古屋の新聞『扶桑新報』の明治19年11月30日紙面の「去廿八日岐阜通信」に、「末広座焼失 昨廿七日午後六時頃 当地末広町の同座にては 失火の為焼失及び類焼家屋二棟許りありたり」とある。
- 2) 本調査で集めたデータを一覧にしたものは、冊子『岐阜地域芝居興行記録一覧稿（明治初年～）』にまとめた。本稿と同様 JSPS 科研費25370213（研究課題名：幕末から明治初期の岐阜の芝居（劇場と役者）の実態）の助成による。
- 3) 筆者が利用した岐阜県図書館蔵のマイクロフィルム資料における現存の『岐阜日日新聞』は、明治19年については4月まで（5～12月欠）、20年については1月25日以降であるため、同資料から確認することはできなかった。
- 4) 『岐阜日日新聞』明治20年6月28日に「○国豊座の改築 当地伊奈波国豊座は当夏中に改築する由にて 已に其鉄柱等も大坂表へ注文の由なるが 愈々右鉄柱等が到着すれば追々改築に取掛る由」の記事があり、関連する可能性も考えられるが、この改築についても続報はない。
- 5) 両新聞記事の全文は以下の通り。
 ○末広座の評判 今回岐阜市末広町に新築したる末広座は 愈 明日を以て小屋開きを為す由は既に掲載したるが 其の芸題の魁難波戦記は 是迄名古屋地方にて面白くないと云ふ不印を土産として持ち来りし様に聞きたり 何にしても河蔵の如き 以前門付け役者の矮が座頭の位置にすわり 橋三郎とか聞く俳優が書き出しにては 余り感心仕らず お負けに松本男升と云ふ暫く東京の地を踏んだ計りを滅法鼻にかけける狎児役者が 恰似強気に中軸に構へ居ては 呆れて見物する気がさゝないと 区々の噂あれと 左様に云ふのも余り気の毒なれば 一度見て遣つておくなんし 何だつて 小屋開き早々ケチを付けては 末広座を改めて末狭座とせにやアならないからね（明治26.4.2）
 ○見事に損耗 岐阜市末広町に玩弄物の蔵程な小屋を建て、末広座と名づけ 先頃小屋開きだと云つて 名古屋東小屋の山崎何んとやらいふ役者の一座を招き興行した処 役者と見物人と孰らが多いと云ふ様な不人気で 見事に損耗し 末広が末狭に成りさう故 次ぎ興行は何が好からうと 座元は頭痛捻ぢ鉢巻きの由（明治26.4.14）
- 6) 末広座では、明治15年2月に菊五郎と左団次、16年2月に団十郎が興行している（拙稿「岐阜の伊奈波の芝居小屋－末広座と国豊座－」参照）。
- 7) 国豊座が倒壊したことを明記した記録は地震当時には見られないが、後掲の記事で「震火災の為め灰燼となりし」（岐阜日日新聞 明治26.6.2）とあり、倒壊は疑いない。
- 8) 5番目の記事「国豊座の落成近し」中の「岐阜演劇株式会社」が疑問であるが、他に例が認められないため、同一の会社を指すものと現時点では考えている。
- 9) 尾上卯三郎については、『岐阜市史 通史編 近代』「三 岐阜市出身の俳優」の「二代目尾上卯三郎」（p.1087）に詳しい。
- 10) 中村駒之助について、『歌舞伎俳優名跡便覧（第四次修訂版）』（国立劇場調査記録課）では4代目で春木座座頭を務めたのは明治21年以降28年7月までとし、『歌舞伎人名事典』（日外アソシエーツ）では6代目で29年頃に同座座頭を務めたとしている。
- 11) 7代目浅尾奥山は、16年駒雀、26年藤蔵の改名を経ているが、28年に駒雀を名乗る役者は見

当たらない。

- 12) 当該新聞記事は「○俳優の寄附金 今回伊奈波国豊座開場に出勤する筈の当市出身俳優尾上卯三郎丈は 伊奈波神社々殿新築費の内へ 金拾五円を寄附したりといふ」(岐阜日日新聞 明治28.12.13)。
- 13) 岐阜の芝居小屋については、『岐阜市史 通史編 近代』の pp.1054～1086に詳しい。ただし、同書の記載と筆者の調査結果が一致しない部分がある。
- 14) 当該新聞記事は「○川上薫一座の壮士演劇 夫の川上薫一座は昨十七日より 当市美殿町泉座にて演劇を開場せり 芸題は板垣退助岐阜遭難実記八幕、義賊固め小僧四幕にて 役割は左の如し(略)」(岐阜日日新聞 明治29.6.18)。

参考文献

『岐阜県史 通史編 近代下』 岐阜県 1972

『岐阜市史 通史編 近代』 岐阜市 1981

『近代歌舞伎年表 名古屋篇』 1～8 八木書店 2007～14

倉田喜弘編『明治の演芸』 1～6 国立劇場調査養成部芸能調査室 1980～85

国立劇場調査記録課編『歌舞伎俳優名跡便覧(第四次修訂版)』 日本芸術文化振興会 2012

清信重『岐高百年史』 岐高同窓会 1973

土谷桃子「板垣退助岐阜遭難の芝居～明治十五年の作品を中心に～」『岐阜大学国語国文学』38、2012.3

土谷桃子「岐阜の伊奈波の芝居小屋－末広座と国豊座－」『岐阜大学留学生センター紀要2014』、2015.7

土谷桃子『岐阜地域芝居興行記録一覧稿(明治初年～)』JSPS 科研費25370213助成調査成果、2016.3

富澤慶秀・藤田洋監修『最新歌舞伎大辞典』 柏書房 2012

野島寿三郎編『新訂増補 歌舞伎人名事典』 日外アソシエーツ 2002

『明治十五年七月十二日～二十二年十二月二十九日「岐阜日日新聞」見出し一覧(発行順)』 岐阜市歴史博物館 1988

『岐阜日日新聞』、『金城新報』